



社会的インパクト評価 報告書

東日本大震災の被災地におけるアクションリサーチ

2026 年 3 月 31 日

大阪大学大学院人間科学研究科
プロジェクト IMPACT



目次

ご挨拶	2
1. はじめに	3
2. サマリー	5
3. プロジェクトの概要	
3.1 野田村と大阪大学の15年	6
3.2 時期(「Ⅰ 救援・復旧」「Ⅱ 復興」「Ⅲ まちづくり」)ごとの活動と成果	8
4. 評価結果	
4.1 社会的インパクトの領域	14
4.2 社会的インパクトの内容	
A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献	14
B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及	21
5. おわりに	25
6 資料	
6.1 主な研究成果	26
6.2 主な活動成果	27
6.3 主な政策形成への寄与	30
6.4 主なメディアへの掲載	31
6.5 インタビュー協力者	34
注	35
謝辞	37

ご挨拶

大阪大学の OU マスタープラン 2027 には、社会との共創による社会変革に取り組む大学像が示されており、「社会に貢献する」ことにとどまらず、一歩踏み込んで新たな「社会を創造していく」大学が目指されています。とはいえ、社会の創造は、大学だけによって成し遂げられるものではなく、社会と共に大学が、新しい価値や仕組みを共創していくものでしょう。その時、大学がどんな役割を果たすことができるのか。このことを考える上で、これまでの大学で行われてきた研究・教育・実践活動が、社会にもたらしてきた影響(社会的インパクト)を、冷静に評価してみることが、そして、その成果を大学の価値・可能性として広く社会に知っていただくことが、重要であると考えます。

人間科学研究科では、2024 年度より、大阪大学 OU マスタープラン実現加速推進事業の支援を受けて、プロジェクト IMPACT に取り組んできました。このプロジェクトの1つの目標は、研究科の教員の取り組む研究・教育・実践活動の社会的インパクトを把握する方法を見出すことです。2024 年度には、英国の大学評価枠組 REF を参照して社会的インパクトの評価手法を探りました(「IMPACT REPORT vol.1」)。そして、2025 年度には、野田村プロジェクトについての評価を試行しました。本報告書はその結果をお伝えするものです。作成にあたって、ご協力いただけたみなさまに感謝申し上げます。本報告書が、大学における社会学共創活動の社会的インパクト評価の具体例の1つとして、今後の社会的インパクトをめぐる議論に貢献できれば、幸いです。

人間科学研究科 研究科長

西森年寿

1. はじめに

本報告書は、大阪大学大学院人間科学研究科で取り組まれている「東日本大震災の被災地におけるアクションリサーチ」(同附属未来共創センターIMPACT オープンプロジェクト「復興まちづくりラボー野田村」[渥美公秀教授代表])を社会的インパクト評価の第一ケースとして取り組んだ報告書である。

本プロジェクトは、東日本大震災での被災地支援を契機に取り組まれ、災害ボランティアや復興にかかわるアクションリサーチ、被災地住民と大阪大学の教職員・学生との交流、その他さまざまな教育・研究活動へと展開して今日に至っている。2011 年からおよそ 15 年にわたって取り組まれてきた社会学共創の取り組みである。

共創やそれを通じて生まれる価値及び共創知のプロセスは、大別して 2 つあると言われる。一つは、技術開発分野を主として、大学で生み出された専門知が社会に応用され価値創造やイノベーションが起こるというものである。もう一つは、人文・社会科学分野を主として、専門知識はさまざまなアクターとの相互作用を通じて大学の外で生み出されているというものである。同様に、社会的インパクトにおいてもそれぞれ異なるプロセスが想定され、前者については、大学で生み出された知が間接的直接的に受益者に与える変化という一方向的な社会への影響である。後者については、双方向的な、またネットワーク的な関係やプロセスのなかで共創しながら生まれている影響である(「IMPACT REPORT vol.1」)(図 1 参照)。

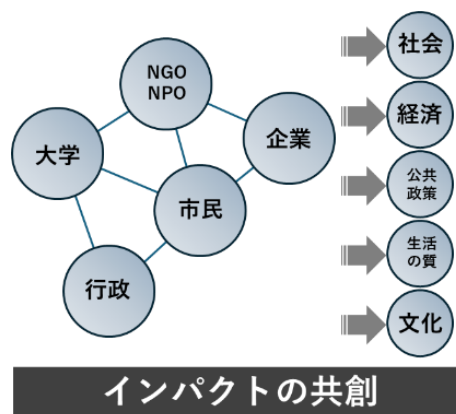


図1. インパクトの共創プロセス

ただし実際には分野によって明確に分けられるべきものではなく、人間の心や生活に変化を与える社会的インパクトはそのプロセスにおいて双方向的であり関係的なものであろう。であれば、社会的インパクトの把握も双方向性をとらえた手法が必要となる。こうした議論を踏まえて、プロジェクト IMPACT では社会的インパクトは相互作用を通じて共創されているという視座に立って、双方向性を重視するアプローチを採用し、本プロジェクトのインパクトとその共創プロセスの把握を試みることにした。

この双方向的アプローチは、本プロジェクトの核にあるアクションリサーチという研究手法や、個人と集団は相互に影響を与え合っているというグループ・ダイナミックス理論の考え方とも親和性がある。また災害救援という複雑な介入とその後の内発的復興においては、当然ながら相互作用や双方性が非常に重要になってくる。したがって、本プロジェクトの評価では、共創にかかわった人びとへのインタビュー調査をもとにした質的手法を取り入れている¹。なお、本プロジェクトを事例にした社会的インパクトの把握手順や方法論については、「IMPACT REPORTno.2」を参照していただきたい。

本調査は2025年4月から2026年3月まで取り組まれ、資料・証拠収集、インタビュー調査²、分析、報告書執筆まで実施された。社会的インパクトの発現状況は2025年時点である。大阪大学だけでなく、他大学や他団体と一緒にチームで取り組みながら、被災地と大学の共創活動によって生まれている社会的インパクトであることをあらかじめ断っておく。活用したデータやエビデンスは以下の通りである(「6. 資料」に一部掲載)

- ① 研究成果、活動成果としての報告書や書籍、論文
- ② 政策形成への寄与を示した文書記録
- ③ 地元メディアに掲載された記事
- ④ 本調査の関係者インタビューのデータ

以下、本報告書の構成である。2節でサマリー、3節でプロジェクトの概要を時期に分けて示し、4節で評価結果として本プロジェクトが与えた社会的インパクトを、「A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献」「B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及」と提示する。5節で結びを述べ、6節に資料を掲載している。

人間科学研究科 プロジェクト IMPACT

今井貴代子 内山志保

2. サマリー

東日本大震災の被災地におけるアクションリサーチ インパクトストーリー

東日本大震災の被災地である岩手県野田村において、阪神・淡路大震災での被災経験があり災害復興ボランティアの研究に取り組んでいた渥美公秀教授は、八戸、弘前、関西の大学や高等専門学校、災害救援 NPO やボランティア団体、また野田村住民等とともにチーム北リアスというプラットフォームを結成し、住民に寄り添った災害救援活動を行ってきた。その後、大学の専門性を生かしたサテライト拠点や OOS 協定を通じて、大阪大学教職員・学生と野田村住民・関係者の交流によるさまざまな共創活動を展開してきた。こうした15年にわたる被災地と大阪大学を含む外部者との共創によって、「A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献」「B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及」という社会的インパクトが生まれている。

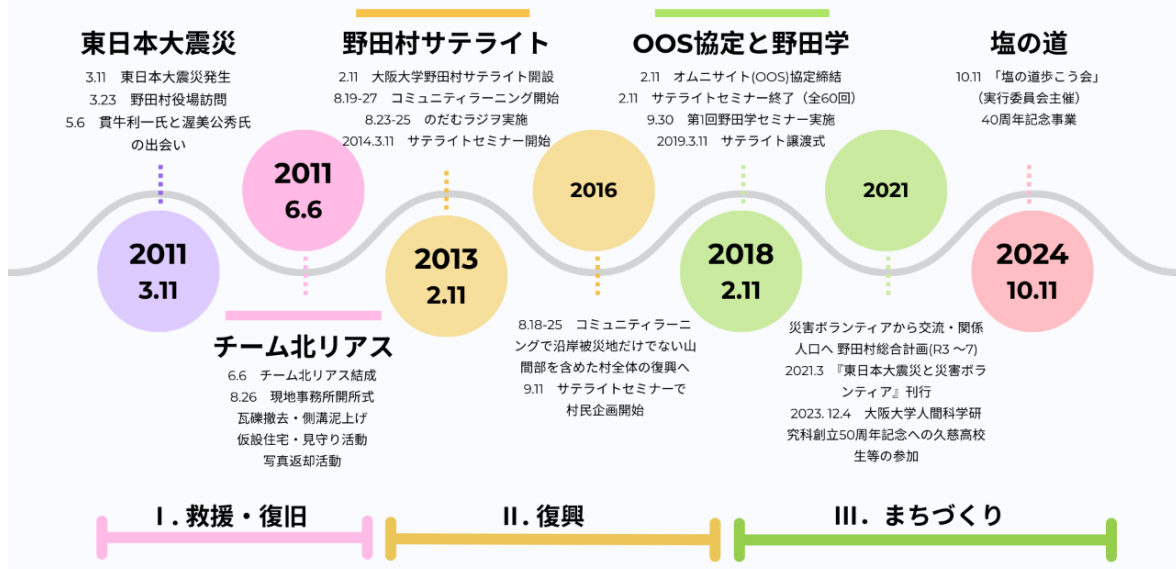


図2. 野田村と大阪大学の15年

インパクトの双方向性＝被災地と大学を含む外部者との共創によって生まれた価値

2011年の東日本大震災から15年、野田村の人びとからは、「震災で失ったものも多いが得たものも多い」という言葉が聞かれた。同時に、教員や大学生をはじめ外部者も野田村から多くのことを学んできた。

社会的インパクト／

A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献

野田村では、災害ボランティアという外部者との個々のつきあいが住民を勇気づけ元気づけてきた。その後、住民一人ひとりとのつながりを重視する共創活動が展開され、住民主体の復興の営みへとつながっていった。野田村と外部者の「村内外のつながり」「寛容」「村の誇り」「伝統や文化」「次世代の子ども」「住民主体の復興まちづくり」という共創価値の創造に寄与した。

B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及

教職員・学生、野田村住民、NPO、企業、行政が交流する知・技術・人的ネットワークが構築され、課題解決や新しい価値創造に向けてアプローチする次世代が育成された。また、2018年の西日本豪雨や2024年の能登半島地震の際には、大学がハブとなる被災地支援活動と住民交流のあり方が目指され、その際、野田村のケースがモデルになるなど、波及効果が生まれている。

3. プロジェクトの概要

3.1 野田村と大阪大学の15年

本プロジェクトの代表である大阪大学大学院人間科学研究科の渥美公秀教授は、社会心理学、グループ・ダイナミックスを専門とする。1995年の阪神・淡路大震災で被災し、それ以降、災害ボランティアをテーマとして協働的实践とアクションリサーチに取り組んできた。大事にしているのは「ただ傍にすること」。また、阪神・淡路大震災後に立ち上げた認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)の理事長でもある。2011年の東日本大震災の被災地・岩手県野田村³においてチーム体制で救援活動にとりかかり、それ以降もさまざまな教育研究活動や共創活動を展開してきた。このようにチーム体制で取り組んできたことはその後の社会的インパクトの共創へとつながっている。

本プロジェクトは15年にわたり続いてきたが、発災直後から現在に至るまで、地域の被災状況、復旧・復興のプロセスや住民とのかかわりに応じて柔軟に変化してきた。図2はそれらを災害復興プロセスの時期区分に分け、それぞれに象徴的な出来事や活動を記したものである。また3.2では時期ごとの活動や成果を記している。

災害復興プロセスの時期区分「救援・復旧」「復興」「まちづくり」に当てはめると、「Ⅰ 救援・復旧」は2011年～2012年で、発災直後に渥美教授と関西の災害ボランティア研究者らが岩手県野田村に初めて訪問して以降、チーム北リアス⁴という災害ボランティアのプラットフォームのもと救援・復旧活動に取り組んだ時期である。「Ⅱ 復興」は2013年～2017年で、大阪大学が野田村に大阪大学野田村サテライト⁵という交流拠点を設置して以降、大阪大学の教職員・学生と住民との交流や教育活動がさまざまに展開された時期である。「Ⅲ まちづくり」は2018年のサテライトの譲渡や大阪大学大学院人間科学研究科と野田村とのOOS協定⁶締結以降で、大阪大学やチーム北リアスに限らない多様な外部者が野田村のまちづくりに取り組んでいるという、現在に至る時期である。

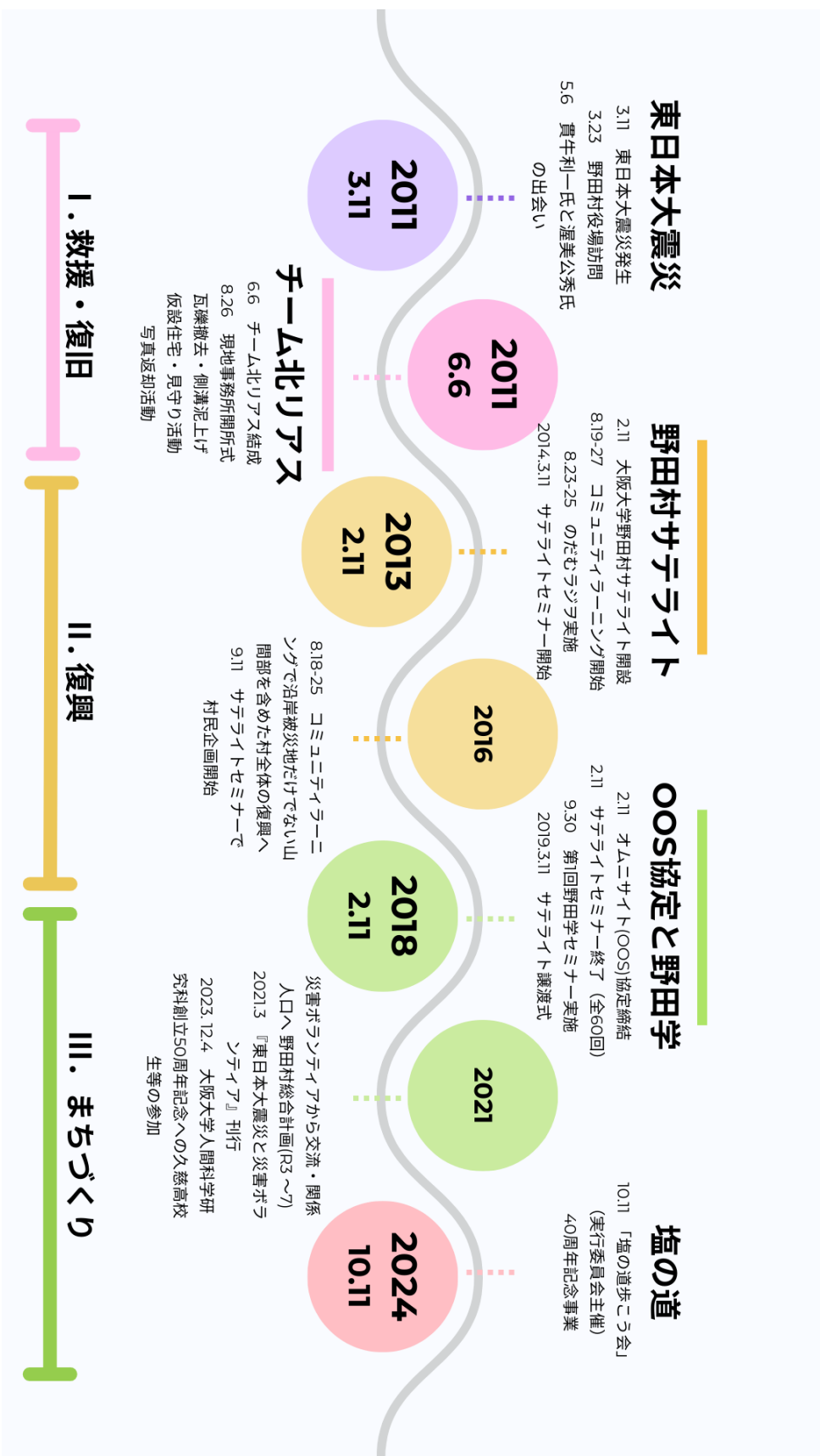


図 2. 野田村と大阪大学の15年

3.2 時期(「Ⅰ 救援・復旧」「Ⅱ 復興」「Ⅲ まちづくり」)ごとの活動と成果

Ⅰ 救援・復旧(2011～)：チーム北リアスとして野田村で活動を開始

チーム北リアスというチームの一員として被災地支援にかかわったことで野田村住民に安心感をもたらし、住民を元気づけ、その後の継続した関係性やさまざまな共創活動につながった。

活動 2011年発災直後、阪神・淡路大震災での被災経験のある渥美教授は、関西の災害ボランティア研究者(矢守克也京都大学教授、永田素彦京都大学准教授、八ツ塚一郎熊本大学准教授)と NVNAD(認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク)と一緒に、メディアで取り上げられていなかった当時約 4000 人の岩手県野田村に青森県八戸市から南下し、今後の救援活動の展開を野田村で行うことに決める。意気投合した野田村住民、貫牛利一氏がキーパーソンとなってチーム北リアスという八戸、弘前、関西等の有志からなるゆるやかなプラットフォームがつくられ、貫牛氏の自宅敷地内にチーム北リアスの現地事務所を構え、チーム北リアスのビブス着用のもと学生たちと救援ボランティア活動に取り組んだ。

成果 チーム北リアスというチームで活動したことで野田村住民に安心感と元気を与えると同時に、村内に被災者－非被災者の構図が生まれかねないところを、第三者の外部支援者としての立場で住民に寄り添うことにつながった。



チーム北リアスのロゴの入ったビブス

2011年3月24日 デーリー東北（掲載許可:デーリー東北）

野田 ボランティア不足

阪大大学院
教授ら村視察
協力者募り支援へ



住民から被害の現状を聞く瀧美公秀さん（右から2人目）
 11月23日午後1時45分ごろ、野田村野田

[illegible]

ネーターの必要性は、
ラティエアの必要に
▽建群住居の心のケア
の必要性を、自ら担
当。村議員の負担を
大きくする。民間が
大きな仕事を移して
ない、と金銭がつか
り、と述べていた。
瀬川さんとは、後、
八戸の学生との参加
募りながら、開校に
ある兵隊服と、週休
日、野田君の求め
す意向、ラティエ
アを、誰か、要ら
ない、と、外から
、それからの力
、要、自分の
、生か、最後
、を、と、と

2011 年 6 月 12 日 岩手日報 (提供:岩手日報社)



チーム北リアスの現地事務所開設準備室が開設し、看板を設置する貫牛利一さん（左）＝野田村

継続奉仕へ拠点準備

野田で
地域越え連携誓う
団体有志

青森県や関西の有志でつくるボランティアグループ「チーム北リ阿斯」は11日、野田村の被災後、それぞれ同村で活動していたが、連携しようとして5月にチームを立ち上げた。

や教員を中心にがれき撤去や、仮設住宅で生活する被災者の要望に応えるボランティア活

準備室を設置したの
動を行う。

所開設準備室を設けた。同村での継続的な支援を目指し、7月中旬に現地事務所を開設する。

所と倉庫兼ボランティア

現地事務所の所長となる貫牛利さんは「一人ではできない部分もあるが、全国からの応援は心強い。これを機に皆

アスタットの宿泊施設
とする。

さんと一緒に活動して
いきたい」、八戸高専の

大の教員や学生、NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（兵庫県西宮市）のメンバーで組織。震災

貴牛さん宅は、同村の野田田の仮設住宅から歩いて約5分。同チームは今後、被災者のニーズに合わせ、学生

河村信治教授は「当事者意識を持ち、被災者と共に活動してほしい。復興の手助けをしたい」と意欲を示す。

Ⅱ 復興(2013～) :大阪大学野田村サテライトを拠点に共創活動を展開

大阪大学野田村サテライトという交流拠点の設置で、大学生や教職員が長期にわたり野田村に訪れることになった。住民は新しいものを受け入れることへの抵抗が減っていくと同時に、さまざまな共創活動がきっかけとなって住民の村に対する誇りやアイデンティティが醸成されていった。

活動 2013 年、チーム北リアス現地事務所の隣に、住民と大学の交流拠点である大阪大学野田村サテライトを設置した。サテライトでは5年間毎月、月命日に未来共生セミナーを開催し(計 60 回)、大阪大学等の教職員が講師となり多様なテーマで展開した。現在に至るまで毎夏 10 日間、大阪大学の学生 10～15 名程度が村内をフィールドワークし、成果報告会の開催と報告書作成を行っている。同期間フィナーレは山車引きのある野田まつりで手伝いをする。

成果 当時、震災の爪痕が残り、住民にも今後の展望を考えることが難しい状況の人もいた。セミナーも参加者が定着せず、最初は大学主導であった。フィールドワークで学生たちも外部者の立場でどのようにかわればよいのかを試行錯誤していた。こうしたなか、地道な場づくり、関係構築、そして村の魅力発見を外部者として楽しみ続けることで、やがて 2016 年頃から「村民企画」セミナーが開催されたり、夏のフィールドワークが風物詩となり、復興コミュニティラジオが取り組まれたりと、住民が主体的にかかわり自分や村を語る機会が増えてきた。また、被災した海側と被災していない山側という村内の被災地域－非被災地域の構図の話を貫牛氏から聞いた渥美教授は、海から山へ、村全体へという視点で考えていくことの必要性和重要性を感じ、2016 年から山側の集落をテーマにフィールドワークに取り組んだ。



大阪大学野田村サテライト(右)

2013年2月20日 岩手日報（提供：岩手日報社）

大阪大野田に研修拠点

大阪大（大阪府吹田市、平野俊夫総長）は3月、東日本大震災の被災地の野田村に、大学院生を対象としたサテライト施設を開設する。「多文化共生社会」をテーマにした5年間の同大のプログラムの一環で、学生が同村を拠点に一定期間滞在しながら現地での研修を実施する。村民との相互交流が大きな目的で、地域復興の力として期待される。

来月、院生対象に開設

住民と交流 再興支援

5年間「共生社会」テーマに

サテライト施設開設 人間科学、工学、医学を地事務所がある同村野田は、震災直後から同村で学ぶ大学院生らが参加するの民有地に、プレハブ2活動するボランティアアグ。文部科学省の「博士 階建ての建物を整備。講ループ「チーム北リアス」 課程教育リーディング 義室のほか、学生たちが 同大はインドネシアに

に同大教授や学生が参加 ログラム」を受けた事業 滞在中のスペースを確保もサテライト施設を同時設置。大阪と同村、インドネシアをインターネッ トや衛星回線でつないだばさらに復興や地域活性化につながる」と期待す

同大の未来共生イノベ 間滞在中の予定だ。 具体的活動は今後決 めるが、専門家を招いた 国内外の震災の経験を踏 遠隔教育も行うという。 3月11日には開設記念

ター博士課程の講座と サテライト施設とし まえたディスカッション

して、国際公共政策学や て、チーム北リアスの現

や都市計画、労働経済学 として、北海道大や海外 などの講義を予定。村民 の災害の研究者らを招い も聴講を可能とする。教 たセミナーを開催する。 員や学生による地元の子 チーム北リアスで活動 どもたちへの教育活動や するプロジェクト担当者 漁業、農業者ら村民から の講義なども計画してお 間科学）は「これまで住 民の方々が主体となった 復興のために何ができ るか考えてきた。学生たち には教科書に書いていな いことを体感してほし い。教員、学生、村民が 相互に学び合う場にした い」と意気込む。

小田祐士村長は「若者 たちが来ることは被災者 や村を元気づける。学生 時代だけでなく、長く拠 点として活動してもらえ

Ⅲ まちづくり(2018～)：村の誇りの再発見と創造

被災者支援や救援支援のモデルにとどまらない、それらを契機とした長期的復興や関係人口を含んだまちづくりへの波及効果や次世代育成モデルの提供、震災前から続いてきた村の取り組みの再活性化や住民主体的な活動へと広がっている。

活動 2018年にサテライトは終了し、チーム北リアス現地事務所に委譲された。同時に野田村と大阪大学人間科学研究科でOOS協定が締結され、「村民による村民のための『野田学』」がスタートし、「10年後に他の村では真似できないようなユニークな村になること」をモットーとする取り組みを始めた。熊本地震、大阪北部地震、西日本豪雨、能登半島地震の際にはボランティアや救援物資、募金が次の被災地に届けられるなど「被災地のリレー」⁷も生まれた。弘前大学、八戸工業高等専門学校、関西学院大学の学生は今も野田村に通い、高台移転した新町の夏祭りを手伝っている。チーム北リアスに所属する大学以外にも、日本基督教大学(ICU)の学生が「野田村にICU旋風を起こす会」を立ち上げて交流し、大阪大学で渥美教授と一緒に共創活動に取り組んでいた石塚裕子教授が東北福祉大学に異動し、東北福祉大学とのつながりを生み出している。大学生や外部者が歩いていることはあたり前の風景となった。



成果 災害ボランティアから交流人口・関係人口へという継続した外部者とのかわりか、住民を元気にしていることを同じく住民である役場職員や前村長が感じ取り、村外とのつながりを「ここはいつも野田村民」の制度で可視化するなど、村外とのつながりを取り入れた施策や事業が取り組まれるようになった。施政方針演説では、前村長が「大阪大学との関係をさらに深化したい」(R2,3,4)と述べ、野田村総合計画(R3～7)にもOOS協定が位置づけられた。また、震災以前から住民が村のシンボルの一つとして大事してきた「塩の道」⁸の復活に向けて、外部者も一緒になって取り組まれるなど再活性化の動きが広がっている。

2019年5月15日 岩手日報（提供：岩手日報社）



野田学の講義に真剣に耳を傾ける職員ら

野田の将来 柔らか頭で

村職員向けセミナー

大阪大 大学院と連携 初回は防災学ぶ

野田村は本年度、大阪大学大学院人間科学研究所と共同で、村職員向けセミナーの「野田学」を開講した。両者が結ぶオムニサイト（OSS）協定の一環で、同大の知識を生かして地元を見つめ直し、ユニークな村づくりにつなげる。

13日は村役場で第1回講義を開き、東日本大震災以後、同村で定期的に活動が続けている渥美公秀教授（57）＝共生行動論＝らが「まちづくりと減災（助かる）社会を目指して」と題して講演。約30人の職員が参加した。

渥美教授は同大が兵庫県上郡町赤松地区で策定に協力した地区防災計画を例に説明。自然な形でまちづくりに防災も織り込む方法を伝えた。

同地区で恒例の「白旗城まつり」は年々来場者が増加する一方、地区の高齢化率が37・7％に達し、会場へ足を運ばない高齢者が増えていた。そこで、昔は参加していたお年寄りに一人でも多く参加してもらうことを目標に地域住民と話し

合いを進めた。イベント準備を進める中で、参加者の把握は災害時の要援護者リストの確認、

会場への移動手段は災害時の避難手段、会場での休憩場所や車いす等の用意は避難所などの環境整備と共通することと住民と共有。そこで得た情報や課題をまとめ、防災計画の策定につなげた。

渥美教授は「地区防災計画には決まった形式も分厚い書類も要らない。野田村からみんなが助かるユニークなモデルが生まれればいい」と期待した。講義は月金日の11日前後に開催。今後はニホンザルの生態、男性学、都市計画など多様なテーマが予定され「一貫性がないのが特徴」（渥美教授）という。

小田祐二村長は「職員にはさまざまな視点で柔軟に対応する力を養ってほしい」と狙いを語る。

4. 評価結果

4.1 社会的インパクトの領域

2011年の東日本大震災から15年を経て、野田村の人びとからは、「震災で失ったものも多いが得たものも多い」という言葉が聞かれた。同時に、教員や大学生をはじめ外部者も野田村から多くのことを学んできた。このような野田村と大学を含む外部者との共創によって生まれた双方向的な価値が本プロジェクトの社会的インパクトと言える。それらは主に、「A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献」「B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及」という2つの領域への影響である。4.2では、証言や資料を通じて社会的インパクトの内容を示す。

4.2 社会的インパクトの内容

A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献

野田村では、災害ボランティアという外部者との個々のつきあいが住民を勇気づけ元気づけてきた。特に大学のない村にとって大学生の存在は非常に大きかったといえる。その後、住民一人ひとりとのつながりを重視する共創活動が展開されてきた。それらが住民自らを見直す契機となり、人とのつながりを志向した住民主体の復興の営みへとつながっていった。こうした野田村の人びとから聞かれた15年の変化は、「村内外のつながり」「寛容」「村の誇り」「伝統や文化」「次世代の子ども」「住民主体の復興まちづくり」の6つに整理することができる。

① 村内外のつながりが生まれた⁸

入れ替わり立ち替わり学生が常駐 向き合う学生の姿を力にしてこれた



貫牛利一さん(左)と渥美教授(右)

「チーム北リアスという緩やかな組織体をつくることで、入れ替わり立ち替わり学生さんが野田村に常駐するようになる。そうすると、自然と学生さんと交流する中で、向き合う学生さんの姿をやっぱり力にしてこれた14年だと思う。… 東日本大震災があって、地域の中が変わったかという、ボランティアさんとしてお付き合いした人と何回もやりとりするうちに友達や知り合いになっていき、そのことによって今度野田村に来たらこれを見せようとか、こういうものを食べてもらおうという風に、相手のために自分が何ができるんだろうという風に考えたり、行動に移すようなことができる地域になってきた」(貫牛利一さん：久慈広域観光協議会、チーム北リアス現地事務所)

自分の育った場所をいい村にしたい 学生たちにも疲れたら来てほしい

「やっぱり野田村を活力ある野田村にしたいっていうのはすごく思いますね。野田村、自分の育った場所がなんとかいい村であればいいなって。自分の育ったところ、そして学生たちには疲れた時には来てねって。そうすると、また来るんですよ。また疲れたって…〔移住者に対する〕反発もあって、いいのかいいのかという声が聞こえてきたんだけど、やっぱりチャレンジしたい。野田村をこのまま普通にしばませてしまうよりも、オープンにして、いろんな人が入ってきてもらうというのも一つの手立て。くすぶったままの状態で、年寄りばかり残るよりも、若い人たちがどんどん交流で来たり、かかわって野田村の人口が増えるっていうのはいいと私は思いたいし、言いたい」(小野寺信子さん:農家食堂つきや)



小野寺信子さん

② 外部者に対して寛容になった

心を開けたっていうのが結論 外から来る人に対して寛容になった

「大阪大学だけであれば、なんで大阪大学ってなるけど、そこに弘前大学も入って、八戸高専も入ってチーム北リアスという形になって、あのへんがよかった。よかったというか安心感があって…渥美先生がふらっといるみたいな。何かを押し付けるんじゃないくて、入り込みすぎるんじゃないくて。どこか接点を持ちながら。あれがすごくよかった…前に進まなきゃならないけど、何をきっかけに前に進んでいったらいいんだろう？というときに、いろんなボランティアや学生がやってきた。そこに自分たちは元気を求めていった。自分たちの元気を出すきっかけにしようとした感じがする。特に年寄りが元気になったというか。なんかいいさ、ばあさ、元気になってきたなって…住民たちがだんだん慣れてくるんだよね、職員も。慣れてって怖いもので言葉・文化の違いに違和感なくなっていく。外から来る人に対しても心を開けたっていうのが結論。何が一番よかったかって。そうすると構えがなくなって、今もそうだけど外から来る人に対して寛容になった」(小田祐士さん:前村長)



小田祐士さん

学生たちの若さがバリアを取り払ってくれる

「田舎の人間はどうしても縮こまって、よその人が来るとちょっとバリアがあるけども、学生たちの若さっていうのがね、バリアを取り払ってくれるから。それがすごいと思って。面白いし、本当に楽しいし。大阪弁と野田弁とが混ざり合って」(小野寺信子さん:農家食堂つきや)



佐藤イクヨさん

「みんな若い人たちにも話せるようになったというか、野田弁でもね。半分通じないかもしれないよ、若い男の子にはね。「いやあ、ぬぐくねえのか」って言っても、何言っているんだろう？が半分だろうけど。でも来てもらっているうちに、こっちの人も「暑くないの？」とか言うようになってしまうわけ、おばあさんもね」(佐藤イクヨさん:元民生委員)

③ 考えるきっかけが生まれ、村の誇りにつながっていった

サテライトセミナー

みんな一人ひとり考える力が出た

「サテライトセミナー8回目くらい。宇宙の話、聞いたらね、人の一生とかってちっぽけなもん。その時は思わなかったけれど、後から考えると、ちっちゃなことで悩んでいたって仕方ないって。それを聞いてあまり悩まないようにしようかなって。今ちょっと悩んでいてもちっぽけなことかもしれないし。重要なことかもしれないけど、全体で考えたら大した問題じゃないよなって思った。他の人はもしかしたら違う意見出るかもしれないけど。サテライトセミナーによってみんな一人ひとり考える力が出たんじゃないかな。[大阪大学や外の人たちに]来てもらったことは、やっぱりよかったんじゃないのって」(小谷地栄喜さん:小谷地建業)



小谷地栄喜さん

「村民からすると全員とはお付き合いをしていこうとは思わないけど、気の合った人と末永くお付き合いをしている人たちがいるので、そういうきっかけを作ってくれた」(貫牛利一さん)

「(久慈工業高校)高校生にとってすごく貴重な体験だったと思うんだよね。普通の高校生がそういうレベルの人たちの、先生の講演を受けるってないじゃないですか」(小田祐土さん)

のだむラジヲ

地元の活動をしている人の話に 心をほぐした

「地元の活動をしている人を呼んでいろんな話をした。心が展望をもってこうしていくってところ、それがよかったんじゃないか。心を少しほぐしたというか」(小野寺健二さん:前野田村商工会長)



小野寺健二さん

コミュニティラーニング

学生さんのために誰かを紹介する 地域の財産に



活動中の学生と地域住民：(左)日形井にて、(右)漁港にて

「テーマや話題にもとづいて学生さんたちのために誰を紹介したら本当にそれが成立するのかって考えるわけじゃないですか。そうするとその人自身もそういう人を知っておきたい。知り合いでもいいわけです。これが14年の中で出てきたことで、財産になっていると思います」(貫牛利一さん)

最初は嫌だと思ってたけれど… 慣れと度胸



内野澤進さん(左)と内野澤てるさん(右)

「渥美先生と石塚先生に声をかけられたときは、なんでここまで、被災もしていないのに、ちょっと重荷だなと思って… 最初は嫌だと思っていたけれど、でもいろいろな人と話をしていけば、生まれたところが違って同じだなと思って付き合っ。そのおかげで話をしても話題が通じることあったり、協力したりしていれば、今度の学生さん方は全部中国だったなって、去年、おとしあたりはね、ほとんどだったよって。慣れ

と度胸だね、やっぱり… 堂々と話してもいいのかなと思って。ざっくばらんに話して

いるうちに、紹介したりして人間のつながりもできて。おそらくこういうことでもなければ、隣り部落でも1年に1回も会わないこともあると思うんですよ」(内野澤進さん:元村会議員、日形井住民)

孫の年ぐらいの人から元気もらっている

「孫の年ぐらいの人から元気もらっているようなもんだよ。本当にありがとう」(内野澤てるさん:日形井住民)

自分たちにはないと思っていたものが 実はある

「[学生の質問や問いかけが]すごく大きな気づきを与えてくれる、聞いてくれることによって。地域の人もみんな体感しているんじゃないですか。こんなこと聞かれたら自分の中でこうだなんて出てきたっていう。その気づきが今の野田をつくっているんじゃないですかね。自分たちがいないと思っていたものが、実はあるじゃん。ちゃんと大事なことから価値のあるものを持っているって思えるような人が増えてきたんじゃないですかね。大阪大学さんとかのかかわりを通じて」(松川美穂子さん:足湯&カフェたいようのいちこ、元社会福祉協議会)



松川美穂子さん

④ 村の伝統や文化が再発見されたり創造されたりしている

野田まつりに大学生が参加しているって すごく大きい

「野田まつりに大学生が参加してるってすごい大きいんだよ。学校側からしたら大したことないと思っているかもしれないけど、イベントに協力してただついて歩いているだけみたいなことを言うかもしれないけど、お祭りをやっている方からすると、その子たちがいないとある意味成り立たなくなってきたんだよね。だって仕事休めない、大人がいない、子どもの数も減ってきている。さらにうちの山車なんかにはエンジンがついていない。ちょっとした坂、ひっぱれーって」(小田祐士さん)



野田まつりでみこしをかつぐ学生(右)

⑤ 震災後に生まれた次世代の子どもたちの表現が豊かになっている

子どもたちの雰囲気が変わった 人懐っこさ 素直さ



梶谷裕子さん

「子どもたちの雰囲気もすごい変わったと思うんです…人懐っこさっていうんですかね。素直に反応するようになっているなとかすごく思うんですよ。そういうのを見ていると、自分たちが学生だった頃とは全然子どもたちの雰囲気が変わっていると思うんですよね。やっぱり一緒に仕事をしている人とも、野田の子たちは震災後にいろいろな人と関わ

ようになって、人との距離感っていうか、変わったよねみたいな話をするのがあって。それってすごいなんかいい影響だなんて思っています」(梶谷裕子さん:村役場未来づくり推進課)

⑥ 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりが取り組まれている

「住民主体の復興まちづくり」への貢献で重要なのは、外部者と住民の個人と個人のかかわりやつながりからスタートしていながら、個人のレベルを超えてそれらが地域や行政の復興プロセスに寄与してきたという点である。被災地には被災した人と被災していない人、被災した地域と被災していない地域など、被災－非被災の境界線によって分断が生じやすい。渥美教授によれば、「災害ボランティア活動の一つの落とし穴」とであるという。長期的視野に立った村全体の復興を見据えながら、こうした対立構図になりやすい人や地域の間を調整し、橋渡しする役割の一部を、外部支援者としての災害ボランティアや大学が担ってきたことが、つながりを個人レベルにとどめない地域レベルへと押し上げてきた。

被災－非被災の間の調整役、橋渡し

「渥美先生とやっていて気付いたのは、小さな野田村の中でもがっかり被災した人と被災しなくてごめんねって思っている人たちの調整役というか、やれるけどやれないんだよねという人の橋渡しをやっていましたから、そういうのも大きいですね… こちらはなかなか言いにくいでもんね、いやいや家あるから頑張れって言えないですよ。そのへんを上手に溶け込んで、じゃあやろうかと言いながら巻き込んで。チーム北リアスあたりのメンバーから広まっていたこともあるんでしょう」。

(貳又正貴さん:村役場産業振興課)



OOS 協定を通じて中国・四川へ

張国遠さん*(左)、渥美公秀教授(中)と一緒の貳又さん(右)

*新安世紀(四川)応急技術研究センター(元新安世紀教育安全科技研究院)理事長

村全体の視点で取り組んだことの成果の一つに挙げられるのが、山間地域(横合地区)課題検討活性化事業である。被災はしなかったものの高齢化や過疎などの課題を抱える山間地域で、コミュニティラーニングなどの共創活動が取り組まれたのは2016年である。最初は被災していない山間地域に大学がかかわることに対して、被災した地域の人からも、また山間地域の人からも不審がられた。しかし、窓口となる村民を頼りに活動を続けることで、やがて地区の人たちが元気になっていった。こうした変化を受けて、2025年度から山間地域を対象とした村の新規事業へとつながったのである。

大学や学生の地域に根差した活動がなければ この事業はなかった

「小さな村ですので、地区の人たちが元気になっていったのを職員はわかっています。職員も地域住民ですから。村民であり、職員なので。渥美先生をはじめ大学の方がたや学生のみなさんが地域に根差した活動をしていなかったとしたら、もしかしたらこの事業をやっていなかったかもしれないです。

(貳又正貴さん:村役場産業振興課)

災害ボランティアからはじまった外部支援者との継続したかわり、村の総合計画(R3～7)に挙げられた重点項目の一つ、「6. 交流活動の推進－地域間交流の推進、交流活動の支援」にも記されている。災害ボランティアが自然と村に溶け込んで、結果として交流人口、関係人口へと継続的につながっている自治体はそれほど多くない。ただし、行政としてこれが最初から意図されていたわけでも、また決して行政施策としてトップダウンに進められてきたのではないということも重要である。

未永く交流が続くように 総合計画の基本方針に

「今まで総合計画をつくるときは、村内のリソースをどう使うかしか記述してなかったのですが、未永く交流が続くようにという基本方針が出された新しい総合計画において、チーム北リアスやOOS協定を消す理由はありませんでした」「議会で承認されて予算化されますが、議会での信頼や理解度は高いと思います」

(小野寺修一さん:総務課)



小野寺修一さん

前村長は、「個人というのが一番大きい。いろんな個人の住民たちといろいろな外部の人たちが個人の付き合いをしながら進めてきた」(小田祐士さん:前村長)と述べ、行政があらかじめ何かするのではなく、村の中で進んでいったことに対して行政として必要な手立てや支援をしてきたと話す。

以上のように本プロジェクトは、災害ボランティアなど外部者との交流を契機とした住民主体の復興まちづくりに寄与してきた。

B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及

15年にわたる共創活動のなかで、教職員・学生、野田村住民、NPO、企業、行政が交流する知・技術・人的ネットワークが構築され、課題解決や新しい価値創造に向けてアプローチする次世代が育成された。たとえば、2013年から毎夏10日ほどの期間、大阪大学の学生が野田村に滞在し、海側、山側、まち中で、被災からの復興だけでなく、村の伝統や文化、生業や観光などを村民から直接話をうかがい学ぶフィールドワークを行ってきた。2013～2025年度までに参加した学生は159人、インタビューに協力した村民はのべ321人である。被災の爪痕や記憶が生々しかった初期においては、被災していない大学生自身が「外部・他者・非当事者」という立場で、村民の人々とどのようにかかわればよいか、どうすることが受け入れてくださったお礼やお返しになるのかを考えつづけたフィールドワークであった。今では、野田村の人々と大阪大学の教職員・学生が教育・研究・交流を通じて長年つくってきた信頼関係をもとに学びを深めている(20頁参照)。社会的インパクトの双方向性として、一方に村民主体の復興まちづくりがあるならば、もう一方には教職員・学生の学びや省察がある。

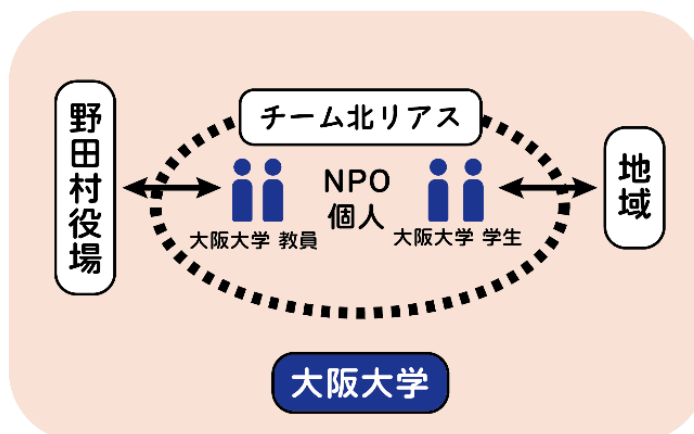
依存しすぎることのないボランティア活動や人間性

貫牛さんは、被災地の一住民という立場でありながら、チーム北リアスとしてボランティアの立場も理解する、「外部の人とのうまいあり方を示せる立場」「中間」に位置してきたという。その核にあるのは、ボランティアの力を借りながらも、ボランティアや行政に依存しすぎることのない住民が主体となる復興である。貫牛さんは「人にとってダメージがあるときに、優しい手を差し伸べる。それをしながら、その人たちの気持ちを今までの気持ち以外の気持ちにさせていくボランティア活動や人間性」が大事だと話す。

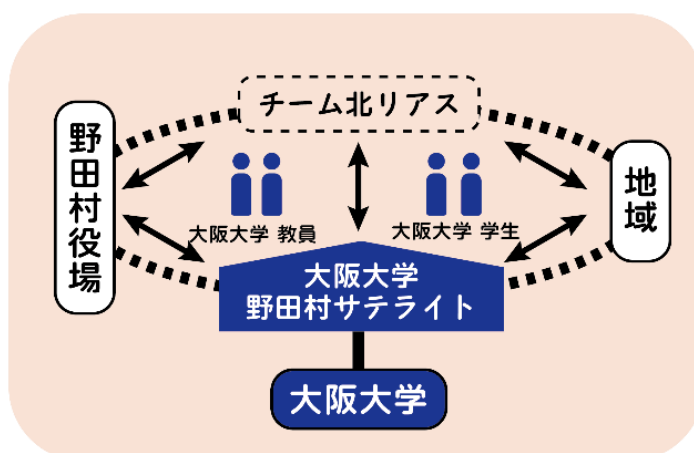
(貫牛利一さん: 久慈広域観光協議会、
チーム北リアス現地事務所)

この鍵となるのが、共創を生み出すチーム体制である。震災発生直後、地元をよく知り地域活動に取り組んできた貫牛氏と阪神・淡路大震災の被災経験のある渥美教授が意気投合し、村民が主体となる復興を目指し、中長期にかけて取り組むことを決めたことは大きい。大阪大学は震災直後の救援・復旧期にはチーム北リアスとして村内に知られ、2013年からは大阪大学の冠のつく野田村サテライトの設置によって大阪大学としてあらためて認知され、2018年からはOOS協定を締結して村と大学は共創のパートナーとなった。復興のプロセスに合わせて柔軟に体制を変えながらチームで取り組まれてきた(図3)。

I. 救援・復旧(2011～)



II. 復興(2013～)



III. まちづくり(2018～)

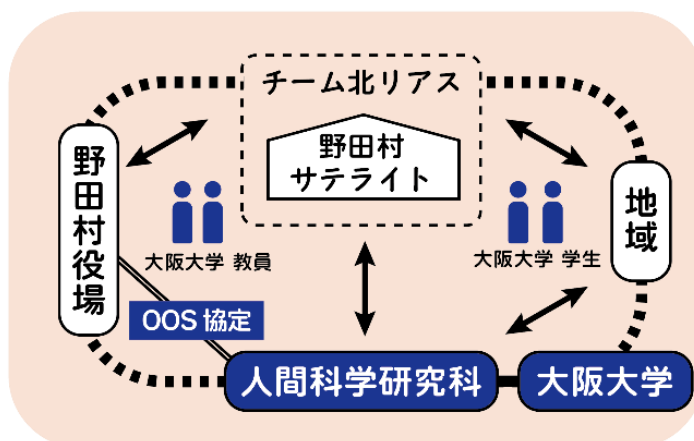


図 3. 体制の変遷

被災地支援から相互交流までを視野に入れたチーム体制や人材育成のあり方、被災地と大学との持続的なかかわりはメディア等で取り上げられてきた⁹。チーム北リアスの活動は、復興庁が主催する「新しい東北」復興・創生顕彰を受賞している（2021年3月）。また、2018年の西日本豪雨や2024年の能登半島地震の際には、大学がハブとなる被災地支援活動と住民交流のあり方が目指され、その際、野田村のケースがモデルになるなど波及効果が生じている。西日本豪雨で多大な被害を受けた愛媛県西予市野村では、愛媛大学や大阪大学の教員・学生が災害ボランティアにかかわり、やがて地元有志と一緒にNPO団体を立ち上げ、現在も復興まちづくりが取り組まれている¹⁰。能登半島地震の支援活動に取り組む福知山公立大学の有志学生ボランティアは、チーム北リアスの活動をモデルにしながら取り組んでいる¹¹。

以上のことから、本プロジェクトは、被災地支援と住民交流をきっかけとした次世代育成モデルの構築と波及に寄与した。

コミュニティラーニングに参加した学生の声

*『未来共生プログラム コミュニティ・ラーニング 東日本大震災 被災地復興フィールドワーク報告書』より

ラジオ放送や報告書以外に何もできないのだろうか(2015 年)

「事前指導の時点で、ラジオ放送という一つの形として野田村の方々に感謝の気持ちを伝える、ということは聞いており、なるほどと思っていたが、実際に野田村に入り、村の人たちと接していくうちに、それだけでは何か物足りないような気持ちになってきたのである。なぜなら、野田村の方々と触れ合い、お話を聞かされた時に、野田村に、野田村の人々に愛着を持ってきたからである。よその土地からひょいとやってきた私たちに対して、こんなにもよくしてくれた野田村の人々との付き合いを今回のフィールドワークでの付き合い 1 回きりにしてしまってもよいのか、ラジオ放送や報告書以外には何もできないのだろうか、このような悩みをメンバーから聞かれることもあった。確かに、物理的な距離や研究関心の差異などから、実際に野田村に頻繁に訪れていくことは困難ではある。しかし、実際に野田村に行くことだけが関係をつないでいくことではないと考えている。それは、節目の手紙のやり取りであったり、電話でのやり取りであったりと、直接的に関わりを持ち続けていくことが一つの関係をつないでいくこととして考えられる。これが理想的なつながりを持ち続けることが困難な場合、たとえ連絡は取り合えなくても、今回のフィールドワークの経験を忘れずに今後の人生に活かしていく、といった間接的なつながり方も考えられるだろう」(参加学生 A)

私たちの不安に勇気を与えてくださった(2017 年)

「野田村という被災地域に土足で入り込むことへの恐怖や申し訳なさのような感情を抱いていたのは、きっと私だけではないはずだ。畑田さんの気持ちのこもったお言葉(引用者注「阪大さんとの付き合いがあったおかげで、熊本などのほかの地域の震災でも何か貢献したいと思うようになりました」)は、野田村へ来たところで村の人々に対し貢献できることはないのでは、という心の奥底に潜んだ私たちの不安に勇気を与えてくださった」(参加学生 B)

「阪大さん？」と声をかけていただき、野田まつりでは「来年も来てほしい」(2023 年)

「なぜフィールド調査がこれほどまでにうまくいったか、というフィールドワークにおけるメタ視点も必要だと考えた。私たちが調査に成功した理由の一つとして、震災が起きた 2011 年から約 10 年間にわたって野田村と大阪大学の教員、生徒が研究、交流を介して常に繋がりが続けたことが第一に考えられるだろう。おそらく震災当時、野田村住民の方々の中には外部、大阪大学と繋がることに戸惑い、葛藤などの気持ちがあったのではないだろうか。また、受け入れてもらう側として「外部の者がどのように野田村に貢献ができるのか」、そして「どのように信頼を得られるのか」と試行錯誤したのではないだろうか。しかし、野田村の復興という一つの目標に対して、お互いが助け合い、理解し合おうとする思いでいたことで、研究する者・される者という枠を超え、確かな信頼関係を作っていくことができたのではないかと考える。…フィールド調査をしている最中も「阪大さん？」と声をかけていただき、野田まつりでは「来年も来てほしい」と 1 年に 1 回の貴重なこの野田村と大阪大学との繋がりを待ち望んでくれている人もいた。今後、私たちがこの素晴らしい繋がりを途切れさせないようにするためには…」(参加学生 C)

5. おわりに

本報告書では、2011 年からおよそ 15 年にわたって取り組まれてきた被災地における社会学共創の取り組みの社会的インパクトを、野田村と大学を含む外部者との共創によって生まれた双方向的な価値として、「A. 外部者との交流を契機とする住民主体の復興まちづくりへの貢献」「B. 被災地支援と住民交流の次世代育成モデルの構築と波及」として提示した。被災地と大学が復興とは何かをともに考え共創し、新しい価値や新たな社会を創造していくことの重要性が示唆された。

インパクト評価において重視したことは双方向性である。救援・復旧活動から復興まちづくりの段階に至るまで、大学で生み出された専門知が社会に応用され価値創造や問題解決に寄与したという直線モデルではなく、現場との相互作用によって、また住民一人ひとりとのかわりから共創価値や社会的インパクトが生み出されてきた。したがってインパクト評価においても関係者、特に野田村の人たちへのインタビューをもとにこの 15 年の変化を質的に描いたことが本報告書の特徴といえる。

1999 年の世界科学会議で採択された「ブダペスト宣言」で、「社会における科学と社会のための科学」が特に重要なポイントとして打ち出されたことは記憶に新しい。その精神は「誰ひとり取り残さない」という SDGs の理念や取り組みにも引き継がれている。本プロジェクトはその「社会とともにある大学」の一つのあり方を提示していると言える。野田村でのインタビュー調査で多くの人びとが、震災からの 15 年の変化を「失ったものも多いが得たものも多い」「数値化できない」「うまく言葉では言い表せない」「どれが一番とかつけがたい」ものとして表現し、大学とともに歩んだ 15 年とそこで生まれた人びととのつながりをうれしそうに懐かしがって笑顔で語っていた。これは「社会とともにある大学」であろうとした大学に、ともに歩んできた社会が確かにあったことの証ではないだろうか。

「社会とともにある大学」、そして「大学とともにある社会」という、豊かなかかわりへの道筋が示された。これらが今後も可能となるような大学の教育研究環境の整備、組織運営力、文化醸成が今後の課題として挙げられる。

6. 資料

6.1 主な研究成果

被災地のリレー

Atsumi, T. (2014). Relaying Support in Disaster-Affected Areas: The Social Implications of a “Pay-it-Forward” Network. *Disasters*, 38(s2), 144-156.

Daimon, H., & Atsumi, T., (2017). “Pay it forward” and Altruistic Responses to Disasters in Japan: Latent Class Analysis of Support Following the 2011 Tohoku Earthquake. *Voluntas*, DOI 10.1007/s11266-017-9880-y.

Daimon, H., & Atsumi, T. (2018). Simulating disaster volunteerism in Japan: “Pay It Forward” as a strategy for extending the post-disaster altruistic community. *Natural Hazards*, Online first, 1-15.

災害ボランティア

Atsumi, T. & Goltz, J.D. (2013). Fifteen Years of Disaster Volunteers in Japan: A Longitudinal Fieldwork Assessment of a Disaster Non-Profit Organization. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 32(1), 220-240.

Atsumi, T. (2015). Against the Drive for Institutionalization: Two Decades of Disaster Volunteers in Japan. A. E. Collins, S. Jones, B. Manyena, & J. Jayawickrama (Eds.) *Hazards, Risks, and Disasters in Society*. Amsterdam: Elsevier, pp.19-32.

チーム北リアス

李永俊・渥美公秀 監修 (2014)『東日本大震災からの復興(1) 想いを支えにー聴き書き、岩手県九戸郡野田村の震災の記録』弘前大学出版会

李永俊・渥美公秀 監修 (2015)『東日本大震災からの復興(2) がんばる のだー岩手県九戸郡野田村の地域力』弘前大学出版会

李永俊・渥美公秀 監修 (2016)『東日本大震災からの復興(3) たちあがる のだー北リアス・岩手県九戸郡野田村の QOL を重視した災害復興研究』弘前大学出版会

写真返却活動

Miyamae, R. & Atsumi, T. (2020). The Picturescue Movement: Restoring Lost Photographs Following the Great East Japan Earthquake and Tsunami, *Disasters*, 44(1) 85-102.

コミュニティラジオ

Atsumi, T., Ishizuka, Y., & Miyamae, R. (2016). Collective Tools for

Disaster Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Recalling Community Pride and Memory through Community Radio and “Picturescue” in Noda Village, Iwate Prefecture. *IDRiM*, 6(2), 1-11. DOI10.5595/idrim.2016. 0183.

渥美公秀・石塚裕子(2018)「コミュニティ FM の番組制作と災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ 電気通信普及財団・研究調査助成報告書」33, pp.1-11

渥美公秀・石塚裕子(2019)「コミュニティ FM の番組制作と災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ(継続) 電気通信普及財団・研究調査助成報告書」33, pp.1-9

石塚裕子・渥美公秀・貫牛利一・小野寺健二(2022)「災害復興過程におけるコミュニティラジオの可能性ー岩手県野田村「のだむラジヲ」の軌跡から」『復興』27 号、Vol.10 No.2 pp.3-9

チーム北リアス・大阪大学による災害ボランティア実践記録

渥美公秀・貫牛利一編(2021)『東日本大震災と災害ボランティアー岩手県野田村、復興への道』大阪大学出版会

6.2 主な活動成果

サテライトセミナー

2013 年の大阪大学野田村サテライトの設置にともなって、2013～2017 年の 5 年間、東日本大震災の月命日である 11 日に毎月サテライトセミナーが開催された(合計 60 回)。野田村住民と外部支援者との交流の場、そして将来的には住民活動が創出される拠点となることが目指された。ただし、最初からうまくいったわけではない。2013 年のセミナーで「復興」がテーマに取り上げられたが、野田村の現実とのズレがあり、大学側の企画で終わった。2014 年には大阪大学のさまざまな教員が参加して幅広いテーマで展開されたが、この年も大学側の企画のままで終わった。2015 年、チーム北リアスと共催したシンポジウムで村民と一緒に「復興」を考えることができ、それ以降、住民の中で村・震災・生業について語る機会が増えてきた。こうして、2016 年に初めて「村民企画」が生まれ、2017 年に「復旧・復興・発災前の備え」がテーマのセミナーが開催された。

《2013～2017 年度の 5 年間》

■セミナー開催 60 回

■うち「村民企画」セミナー 8 回(2016 年 3 回、2017 年 5 回)

■「村民企画」のテーマ:「伝統芸能・日本舞踊」「野田村の鮭」「野田村の小正月行事・なもみ」「野田村産山葡萄ワイン」「北三陸・雲丹(ウニ)」「十府ヶ浦公園」「野田村の食文化と鮭料理」「野田村発 宇宙」

記録:『大阪大学 野田村サテライトセミナーの記録 2013.03.11~2018.02.11』(2018.3)大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生イノベーター博士課程プログラム

コミュニティラーニング

コミュニティラーニングは、2013年から大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生イノベーター博士課程プログラム(文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」複合領域型に採択)の必修授業としてはじまり、2020年度からは、大阪大学学修証明プログラム「未来共生イノベータープログラム」、2024年度からは大阪大学人文社会科学系オナー大学院プログラム社会学共創ユニットの選択科目として、人間科学研究科で実施している。

毎夏10日ほどの期間、大阪大学の学生たちが野田村に滞在し、海側、山側、まち中など村全体をフィールドワークし、被災からの復興だけでなく、村の伝統や文化、生業や観光などを学んでいる。住民から直接話を聞き調べ考えたことを現地報告会や報告書を通じて住民に共有してきた。また、フィールドワーク終盤に開催される野田まつりでは、担い手不足や高齢化などで人手が足りないところをサポートする形で山車引きの手伝いをするなど、外部者として村にかかわってきた。

《2013～2025年度の13年間》*野田村人口 3873名(2024年5月)

■参加学生 159人

■学生がインタビューした野田村住民のべ 321人

■成果報告会 11回(コロナ禍での2020・2021年度オンラインフィールドワークを除く)

■報告書 11冊(2013～2023年度)、ジャーナル掲載報告 6本(2024・2025年度)

■テーマは「復興」から、やがて野田村の「まちづくり」へ

伝統・文化:「なもみ」「伝統」「さおり織り」「野田まつり」「くるみ割り」「食文化」

子ども・教育:「子どもと教育」「保育園や図書館」「ソーラン節・和太鼓」

生業:「産地直売所」「漁業協同組合」「商店街」「畜産業(豚)」

観光と交流:「みちのく潮風トレイル」「アジア民族造形館」「鉱山観光」「道の駅」

暮らしと伝承:「震災伝承」「震災学習」「自然とともに生きる知恵」「伝承の場」

エリア:「浜の人、山の人」「山向こう」「新山・和野平、下明内、日形井」「新町、十府ヶ浦公園、本町・旭、日形井」「横合地区」「山、海、まち」

2013	協働的実践への挑戦ー「のだむラジヲ」を通して
2014	震災と復興を考えるー「協働」の姿勢から見えてきたもの
2015	震災から4年を経た野田村の今ー6人の眼を通して見えてきたもの
2016	野田村の現状と課題ー山向こうの私たちが見た野田村の今
2017	野田村を歩くー復興とトレイル
2018	歩み続ける野田村ーアジア民族造形館からのバトン
2019	村の誇りを育むー震災から9年目を迎える野田村における新たな復興の在り方
2020	あの日から10年、野田村の想い
2021	野田村の記録と記憶を伝承する

2022	持続可能な野田村の創生
2023	復興事業と野田村の今
2024	野田村の地域活性化を考える【役場からの提案】
2025	野田村の地域振興・活性化を考えるー野田村の現状と将来【役場からの提案】

記録:『未来共生プログラム コミュニティ・ラーニング 東日本大震災 被災地復興フィールドワーク 報告書』(2013・2023)大阪大学未来戦略機構第五部門未来共生博士課程プログラム/『未来共創』(2024・2025)大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

野田学

2018年2月にサテライトセミナーが終了したことを承けて、これまで非公式であった大阪大学と野田村との関係を公的なものとする機会として、大阪大学大学院人間科学研究科とOOS協定が締結された。具体的な動きの一つとして、東日本大震災による津波被害からの復興の過程に身を置くことで、野田村との間で新たな共創知を生み出すことを目的とする「野田学」が始まった。野田学では、野田村住民が、野田村住民の力によって、野田村で学び、発信していくことが目指されている。モットーは、野田村が10年後に他の村では真似できないようなユニークな村になることである。野田学は大学の授業と同じように、「講義」「演習」「実習」のセットから構成される。野田学講義の講師はOOS協定をきっかけとしたつながりの中から選定され、大阪大学関係者が様々なテーマで多数参加し、共創知の創造に向けて取り組まれてきた。

《2018～2025年度の8年間》(コロナ禍の2020年度を除く)

■野田学(講義)開催 21回

■講師のべ 25人(大阪大学教員 19人、他大学・機関 4人、野田村住民 2人)

■参加者のべ 457人(久慈工業高校「地域未来学」との共催、高校生参加者を除く)

■テーマ:「防災・まちづくり・社会」系、「自然・科学・食の探求」系、「教育・調査・テクノロジー」系

2018	● 理想的な食生活とは？ー健康情報との付き合い方を学ぼうー(木村知美:大阪大学) ● 実習編「食べる」～鮭を解体&食べてみよう～(小谷地勝氏・小谷地陽子氏:野田村)
2019	● まちづくりと減災:〈助かる〉社会を目指して(渥美公秀・石塚裕子:大阪大学) ● サルを見て、人を知るサルからの人間科学(中道正道:大阪大学) ● 社会の寛容性を高める:生きやすい社会にするために(山中浩司:大阪大学) ● いまどきのまちづくり(小林郁雄氏:阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター)／未来につなぐまちづくり(室崎益輝氏:兵庫県立大学大学院) ● アフリカの開発と教育 野田村にとって遠いところのことなのだろうか?(澤村信英:大阪大学) ● 社会調査の実際(吉川徹:大阪大学)
2021	● 新宗教も大学も同じ?!(川端亮:大阪大学) ● 進路指導って、なに?キャリアって、なに?みなさんの『キャリア』のために(齊藤貴浩:大阪大学)

	大学)
2022	● 防災・復興のための理系・文系の協働とは(宮本匠:大阪大学) ● 農作物被害によって生じるニホンザルと人間の対立について(山田一憲:大阪大学) ● SDGsと自然共生(太田貴大:大阪大学) ● 社会や産業の変化と技(Industry4.0、Society5.0、スマートシティ)～新しい製品サービスについてのブレインストーミング～(上西啓介:大阪大学)
2023	● ビックデータで社会心理を知る(三浦麻子:大阪大学) ● NTN(株)製作のエヌキューブの活用方法を検討(勝又龍介氏・赤川充氏:NTN(株)) ● AI時代の学校教育(西森年寿:大阪大学)
2024	● 誰もが<助かる>社会を創る 野田村から学んだこと(渥美公秀:大阪大学) ● 好き嫌いをサイエンスから捉え直してみる～味・身体・気持ちの観点からの再考～(八十島安伸:大阪大学)
2025	● フェイクニュース拡散と住民の対応:少子化の中でのひのえうま迷信(吉川徹:大阪大学) ● 「かわいい」の心理学(入野宏:大阪大学)

6.3 主な政策形成への寄与

	施策・事業等	部署	エビデンス資料
1	OOS 協定、テレワーク事業等 の 予算化	総務課	● 令和 3 年度 野田村一般会計歳入歳出決算書 ● 令和 6 年度一般会計 がんばるのだ応援基金繰入金
2	野田村総合計画(R3～7)での OOS 協定の明文化と位置づけ	総務課	● 野田村総合計画後期基本計画(令和 3 年度～7 年度)ダイジェスト版 ● 野田村総合計画後期基本計画(令和 3 年度～令和 7 年度)該当箇所(交流活動の推進、コミュニティ活動の推進)
3	野田村復興展示室設立委員会の委員に、渥美公秀教授と石塚裕子講師(当時)が就任 震災伝承活動	未来づくり推進課	● 復興展示室整備事業業務 報告書(秘) ● 「東日本大震災の被災市町村における震災伝承活動を支援します」 ● 震災伝承活動計画(岩手県野田村) ● 東日本大震災 震災伝承活動市町村支援事業 活動実績報告書(令和 3 年、5 年、6 年)
4	学生アイデアでベンチが実現	未来づくり推進課	● 『未来共生プログラムコミュニティラーニング 2019 報告書』(トレイル班の「はまなすプロジェクト」における「ねまるチェア」の提案)
5	ワーケーション等支援事業、地方創生テレワーク推進事業	未来づくり推進課	● 地方創生テレワーク交付金 整備施設概要 ● 地方創生テレワーク推進事業について(令和 3 年 5 月 14 日村政調査会資料)

	プロポーザル方式による企画提案 審査委員に、渥美公秀教授と石塚 裕子講師(当時)が就任	未来づく り推進班	● 野田村ワーケーション等支援業務 業務報告(電通 作成) ● 野田村ワーケーション等支援業務委託 仕様書(令 和 2 年 11 月) ● 野田村地方創生テレワーク推進事業 業務委託仕様 書(令和 3 年 6 月) ● 野田村地方創生テレワーク推進事業 仕様書(令和 3 年 11 月)」 ● 野田村地方創生テレワーク推進事業業務 公募型プ ロポーザル方式による企画提案審査員名簿 ● 令和 3 年度地方創生テレワーク交付金 事業実施報 告書
6	地域活性化アイディア実現補助制 度	未来づく り推進課 移住定住 観光班	● 地域活性化アイディア実現補助金交付要綱
7	横合地区活性化(特定非営利活動 法人 SET への委託)事業(R6～R 8の 3 年間、5 月 18 日にアジアの 広場で関連イベント開催)	産業振興 課 水産 商工班	● 山村地域(横合地区)課題検討事業 ● 野田村山村地域(横合地区)課題検討活性化事業に ついて
8	小田前村長の施政方針演説「大阪 大学との関係をさらに深化したい」 (R2,3,4)	総務課	● 令和 2 年度村長施政方針演説 ● 令和 3 年度村長施政方針演説 ● 令和 4 年度村長施政方針演説

6.4 主なメディアへの掲載

『岩手日報』新聞記事掲載(2011.3～2025.3)「大阪大学」「チーム北リアス」で検索:全 58 件

	活動	日付	見出し
1	チーム北リアス	2011.06.12	★東日本大震災 被災地から★ 継続奉仕へ拠点準備 野田で団体有志 地 域越え連携誓う
2	チーム北リアス	2011.07.02	被災者との会話大切 久慈 渥美氏(大阪大・大学院教授)が講演
3	大阪大学	2011.12.11	阪神から新潟、東日本へ 震災体験者 絆のリレー 野田の住民とボランティ ア 餅つきで交流
4	チーム北リアス	2011.08.28	野田に奉仕活動拠点 青森、関西の有志開所式、住民と交流
5	大阪大学	2012.01.17	震災の絆 永遠に共に 阪神大震災きょう 17 年 野田、宮古から兵庫へ 陸 前高田でも追悼行事

6	チーム北リアス	2012.03.17	★論説★ 震災1年に思う ボランティア これからが本当の支援 2012年3月17日
7	チーム北リアス	2012.03.24	絆を守る支援 知事に訴え 野田、洋野の住民 まちづくりを議論
8	チーム北リアス	2012.08.17	まち復興へ外部の視点 県外の学生らワークショップ 野田ですすから
9	チーム北リアス	2012.09.04	★特集★ 若き担い手 意欲高く 復興ボランティア どう推進 野田中で講演、パネル討論 生徒発表、活動へ決意
10	チーム北リアス	2012.10.21	野田の活動拠点で住民と交流深める 関西や青森の有志
11	チーム北リアス	2012.12.30	★復興最前線 第7部 三陸観光・交流の行方★(6) ボランティアと被災者 絆を強め再生の力に連帯感共有 再訪信じる
12	チーム北リアス	2013.01.21	★復興最前線 被災地コミュニティの今★ 野田の住宅再建見据えた交流 (上) 気軽さ好評 書道教室新たなきっかけを提供
13	チーム北リアス	2013.01.22	★復興最前線被災地コミュニティの今★野田の住宅再建見据えた交流 (下) 散り散りになる不安 移住者溶け込む工夫を
14	チーム北リアス	2013.01.26	野田の修復写真 アルバムで公開 あす返却お茶会
15	大阪大学	2013.02.20	大阪大 野田に研修拠点 来月、院生対象に開設 住民と交流 復興支援 5年間「共生社会」テーマに
16	チーム北リアス	2013.09.14	生活復興「半分超」59% 野田村住民アンケート 住環境と強い関わり 弘前大など研究者調査 仮設では低く
17	大阪大学	2014.01.12	震災体験 共に伝える 野田でセミナー 「阪神」研究の2人講演 継続する重要性説く
18	被災地交流	2014.01.17	野田と兵庫 歩み共に 阪神大震災 きょう19年 村民、交流参加へ訪問 復興の現状伝え合い
19	大阪大学	2014.02.12	関西弁かるたに挑戦 野田の児童ら 大阪大生と交流会
20	被災地交流	2014.04.13	★読書★ 災害ボランティア 渥美公秀著 救援活動への問い
21	チーム北リアス	2014.08.18	山車作り 若い力結集 野田で八戸高専学生 震災で流失、復活へ 22日まつり
22	大阪大学	2014.10.21	地域限定 FM 実験 12月から 久慈市、野田村と連携 エフエム岩手
23	被災地交流	2015.01.16	地域に応じた復興を 盛岡でフォーラム 渥美教授(大阪大大学院)講演
24	被災地交流	2015.01.17	野田村民、今年も兵庫県訪問 全国の被災住民と交流
25	被災地交流	2015.01.31	★企画特集★ 復興の道、後世につなぐ 神戸、盛岡で県フォーラム
26	チーム北リアス	2015.05.01	★復興最前線 第40部 被災地支援の今★(1) 祭りのボランティア 準備、盛り上げに一役 地元の担い手どう補う
27	チーム北リアス	2015.05.24	★新刊寸評★ がんばる のだ 李永俊(イ・ヨンジュン)、渥美公秀(あつみともひで)監修
28	大阪大学	2015.06.12	「写真の力」を再確認 野田で大阪大 住民向けセミナー
29	チーム北リアス	2015.07.31	★ニュースフラッシュ★ ■野田村まち・ひと・しごと創生委が初会合
30	大阪大学	2016.04.12	村民主役の活動継続を 野田でセミナー
31	被災地交流	2016.05.24	農業ボランティア活躍 熊本地震被災の西原村 他地域への広がり期待
32	被災地交流	2018.01.18	二つの災害 教訓胸に 阪神大震災 23年 野田小中学生ら兵庫・西宮で追

			悼
33	大阪大学	2018.02.12	★震災 7 年★ 震災月命日に全 60 回開催 野田セミナー「終幕」 大阪大、活動一区切り 交流継続へ村と協定
34	被災地交流	2018.04.21	防災教育 日中で協議 中国でフォーラム 久慈の NPO 発表
35	大阪大学	2018.08.14	広げる野田の防災力 久慈の NPO と大阪大 交流促進へ協定締結 体験型学習普及を目指す
36	被災地交流	2019.01.18	教訓分かち合う 阪神大震災 24 年 野田中生、兵庫で祈り
37	被災地交流	2019.01.30	★復興最前線 第 74 部 世界とのつながり★(4)体験型防災学習「のどもん」中国への普及を模索
38	大阪大学	2019.01.30	活発な地域活動 災害時に力発揮 大阪大でシンポ
39	大阪大学	2019.03.12	■野田 交流拠点 新たな形に 大阪大 サテライト施設を譲渡
40	大阪大学	2019.05.15	野田の将来 柔らかな頭で 村職員向けセミナー 大阪大大学院と連携 初回は防災学ぶ
41	被災地交流	2019.08.26	■野田 子どもイキイキ 集いの場 村社協と兵庫の団体 復興支援で作画
42	被災地交流	2020.01.24	被災地交流 絆の音色 野田中 西宮(兵庫)で創作太鼓
43	大阪大学	2020.01.31	★復興最前線 第 82 部 教訓の伝承★(5) 未来につなぐ 村職員に開講 「野田学」専門知見生かし育成
44	チーム北リアス	2020.08.10	震災風化防ぐ映画に 野田で被災写真返却活動 写真家・浅田さん作品原案 10 月 2 日全国公開 絆の貴さ伝える
45	チーム北リアス	2020.12.08	★縁(えにし)寄り添い続ける★(85) 野田村を支援する「チーム北リアス」被災写真返却 地道に
46	チーム北リアス	2020.12.30	「新しい東北」に本県 3 団体 復興庁表彰
47	チーム北リアス	2021.02.05	★学芸短信★ ◆弘前大リレーシンポジウム
48	チーム北リアス	2021.04.11	★郷土の本棚★ 復興のための記号論 野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー 宮前良平著 想起に寄り添う活動
49	チーム北リアス	2021.11.02	思い出 写真 語ろう 野田・チーム北リアス 交流重ね最後まで
50	チーム北リアス	2022.03.11	あの日に思いをはせて 野田で復興教育展 東日本大震災 11 年
51	チーム北リアス	2022.03.17	■野田 被災写真 デジタルで残す チーム北リアス 返却、保存に向け作業
52	チーム北リアス	2022.08.20	★本誌記者が行く 駅からぶらり旅★(67)三陸鉄道リアス線・陸中野田駅「塩の駅」歴史伝える
53	チーム北リアス	2023.01.24	■野田 被災写真の返却 活動の方策学ぶ チーム北リアス
54	チーム北リアス	2023.06.19	■野田 データで残す被災写真 チーム北リアス 返却ハスキャン作業
55	大阪大学	2024.10.21	久慈工祭 学び振り返る 野田 統合控え、製作品を展示 新設高の紹介も
56	被災地交流	2025.01.14	★つなぐ共に 阪神・淡路大震災 30 年★(4) ボランティアの統制・秩序化「自主性」見つめ直す
57	チーム北リアス	2025.01.28	■野田 被災写真 検索容易に チーム北リアス データベース化
58	チーム北リアス	2025.03.14	■野田 支援の歩み共有 チーム北リアス 東日本大震災 14 年

6.5 インタビュー協力者(22人) *順不同・所属はインタビュー時点

野田村住民

- 貫牛利一さん(久慈広域観光協議会、チーム北リアス現地事務所)
- 小野寺健二さん(前野田村商工会長)
- 小谷地栄喜さん(小谷地建業)
- 小野寺信子さん(農家食堂つきや)
- 内野澤進さん・てるさん夫妻(進さん:元村会議員、日形井住民)
- 松川美穂子さん(足湯&カフェたいようのいちこ、元社会福祉協議会)
- 佐藤イクヨさん(元民生委員)

チーム北リアス

- 河村信治さん(八戸:八戸工業高等専門学校)
- 外館真知子さん(八戸:南風堂、写真返却活動)
- 李永俊さん(弘前:弘前大学)
- 成田春洋さん(弘前:社会福祉法人抱民舎)

役場

- 日形井賀友樹さん・管崎裕平さん・小野魁斗さん・榎谷裕子さん(未来づくり推進課)
- 小野寺修一さん(総務課)
- 貳又正貴さん・前田綾杜さん(産業振興課)
- 小田祐土さん(前村長)

メディア

- 澤田淳一さん(デューリー東北)
- 平野祥子さん(岩手日報社)

注

- 1 分析にあたって、一部、アウトカム・ハーベストや MSC(モスト・シグニフィカント・チェンジ)の評価手法の考え方も参考にしている。アウトカム・ハーベストとは、特に複雑な状況(災害対応、平和構築、感染症対策など)における介入を評価する際に導入される事例が多く、国際機関、米国国際開発庁(USAID)、フォード財団など数々の機関でも採用されている。アウトカム・ハーベストの特徴の一つはプログラム理論に依らない評価が可能であると言われている点である(日本民間公益活動連携機構(JANPIA) 2024 年『休眠預金等活用制度における 2020 年度実行団体・資金分配団体の事業実施に関する第三者評実施事業 甲信地域支援と地域資源連携事業第三者評価報告書』p.11)。MSC は、欧米の NGO が活用している参加型・質的モニタリング・評価手法である。事前設定の指標を用いず、現場から「重大な変化」のエピソードを集めて「最も重要な変化」を選択することが基本的流れで、人間の意識・行動変容など、想定外・質的变化の把握や分析ができるとされている(田中博、2010 年「参加型・質的評価手法 MSC(Most Significant Change)の国内 3 事例を考察するー学習・改善目的中心の評価」『日本評価研究』)。
- 2 インタビューは 2025 年4月及び6月は岩手県野田村及び久慈市にて、9 月は青森県弘前市にて実施した。対象は主に、野田村住民、チーム北リアス、役場、地元メディアに分けられ、インタビュー内容は主に、大阪大学の活動を通じて生まれた地域や個人の変化・影響、行政施策への反映・影響、災害復興ボランティアの活動や言説に与えた影響など。
- 3 東日本大震災で、野田村は震度 5 弱を記録し、最大約 18mの津波が襲来、津波の最大遡上到達高は 37.8mに及んだ。村内の約 3 分の1にあたる 515 棟の住家が被害を受け、37 名の尊い生命が犠牲となった(野田村役場)。2011 年発災当時の人口は 4,849 人、2024 年現在は 3,873 人である。
- 4 チーム北リアスは、震災直後の瓦礫撤去や泥すくい、茶話会などの交流活動や盆踊り大会などによるコミュニティ形成支援、野田村の子どもへの学習支援、写真返却活動など、被災地の課題に応じてさまざまな活動に取り組んだ。主な所属機関は、野田村現地事務所の貫牛利一氏、チームオール弘前(弘前大学、弘前市社会福祉協議会、弘前市、弘前市ボランティア支援センター、動こう津軽など)、八戸チーム(八戸工業高等専門学校、八戸工業大学、八戸市社会福祉協議会、八戸青年会議所など)、関西チーム(京都大学、大阪大学、関西学院大学、認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)、すずらん)、写真班、首都大学東京、全国有志の個人・団体。
- 5 大阪大学野田村サテライトは、2012 年度から大阪大学で取り組まれた「未来共生イノベーター博士課程プログラム」(文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」複合領域型の採択による)の一環で、野田村に開設・運営されたサテライトである。2013 年 3 月 1 日にオープンし、2 月 20 日付岩手日報の第 1 面トップ記事で「大阪大 野田に研修拠点 来月、院生対象に開設 住民と交流 復興支援 5 年間「共生社会」テーマに」と紹介された。
- 6 OOS 協定とは、大阪大学大学院人間科学研究科が 2017 年 4 月から始めた新たな共創の仕組み「OOS(大阪大学オムニサイト)」である。共生社会を創造していくために、産官学が連携し学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援、活用するものである。

- 7 被災地のリレーとは、過去に被災した地域の住民が、新たな被災地へ支援者として駆けつける現象、あるいは物資や人を介して被災地の思いを次の被災地へ届けることで、かつて助けられた経験を持つ人びとが「恩返し」を未来の被災者へとつなぐことで地域を超えた救援ネットワークが広がることを意味している(Atsumi 2014)。
- 8 野田村では、牛(ベコ)の背に野田村産の塩を乗せて内陸まで運んだ「野田塩ベコの道」の一部を歩くイベントが1984年から続いている(2008年から「野田・塩の道を歩こう会実行委員会」主催 会長 貫牛利一氏)。40周年を経て2023年度には、ルートを盛岡まで伸ばし4日間かけて塩の道を歩く催しが企画され、多数が参加した。このように震災以前からある村の取り組みが再活性化している。
- 9 『令和2年度 野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書』(編集・発行 弘前大学人文社会科学部)によると、村外の人との付き合いについて、高齢者層では29.3%が減ったと答えているのに対し、青年層では24.3%が増えたと答えている。この結果を受けて、村外のボランティアの多くが若い学生であることの影響であろうとの考察がなされている。今回の社会的インパクト評価の調査で村民にインタビューをすると、「お年寄りが元気になった」「孫みたいな学生から元気をもらっている」といった声が多く聞かれたことから、「村外の人とのつきあい」と「村にやってきた学生から元気をもらう」ことは位相が少し異なることも考えられる。また、震災以降のつながりについての変化を問う項目では、約6割の人が、ボランティアのありがたさや近所づきあいの大切さを知ったと回答している。行政への頼もしさが増したという人も4割近く存在する。
- 9 岩手日報はじめデーリー東北など地元メディアに大阪大学の野田村での活動が継続的に何度も取り上げられてきた(岩手日報 2011年～2025年3月「チーム北リアス」「大阪大学」で検索した結果、58件掲載)。2021年3月30日付け読売新聞でも「長期的視野 現地に拠点」というタイトルで、震災以降の長期にわたる大阪大学の教育活動が紹介されている。
- 10 2018年の西日本豪雨災害の被災地の一つ愛媛県西予市野村町で、2020年、地元の野村地域自治振興協議会と、支援活動にかかわってきた愛媛大学社会共創学部、大阪大学人間科学研究科が協定を結び、2021年3月には一般社団法人「NEOのむら」が結成された。NEOのむらは構成3団体の頭文字をとったもので、野村地域のまちづくりを考える団体である。「災害復興を契機としたまちづくり」のモデルとなる活動が取り組まれている。
- 11 2025年3月14日付け岩手日報では「支援の歩みを共有 チーム北リアス」というタイトルで、能登半島地震の学生ボランティアの活動が取り上げられ、野田村での活動に当時大阪大学大学院生として参加し、現在福知山公立大学の教員となっている大門大朗氏の発言が紹介されている。「福知山公立大学はチーム北リアスの活動をモデルとして、学生有志が能登半島地震のボランティアに取り組んでいる。同大大門准教授は「支援活動をつづけながら、住民との交流ができないかを模索している。他の地域から学びながら進めたい」。

謝 辞

社会的インパクト評価の調査にご協力くださった皆様に心より御礼申し上げます。特に、野田村住民のお立場からインタビューに協力いただいた、貫牛利一さん(久慈広域観光協議会、チーム北リアス現地事務所)、小野寺健二さん(元野田村商工会長)、小谷地栄喜さん(小谷地建業)、小野寺信子さん(農家食堂つきや)、内野澤進さん・てるさんご夫妻(日形井住民)、松川美穂子さん(足湯&カフェたいようのいちこ)、佐藤イクヨさん(元民生委員)、野田村役場として協力いただいた、日形井賀友樹さん・管崎裕平さん・小野魁斗さん・榎谷裕子さん(以上、未来づくり推進課)、小野寺修一さん(総務課)、貳又正貴さん・前田綾杜さん(産業振興課)、小田祐士さん(前村長)、またチーム北リアスとしてのお立場から、河村信治さん(八戸:八戸工業高等専門学校)、外館真知子さん(八戸:南風堂、写真返却活動)、李永俊さん(弘前:弘前大学)、成田春洋さん(弘前:社会福祉法人抱民舎)、そして、地元メディアとしてのお立場から、澤田淳一さん(デーリー東北)、平野祥子さん(岩手日報社)には、大変貴重なお話を聞かせていただきました(ご所属はインタビューさせていただいた時点のものです)。

インパクトの把握手順については、2024年11月27日~28日に英国エディンバラ大学で行った社会的インパクト評価の先行事例調査で得た経験や知見によるところが大きいです。視察を受け入れ丁寧にご説明くださった、リサーチインパクト部門責任者アン・ソフィーさん(Dr. Anne Sofie Laegran)、リサーチ データ コーディネーターのジュリアさん(Ms. Giulia Giganti)、リサーチ インパクト マネージャーのスタニスラバさん(Dr. Stanislava Dikova)に感謝申し上げます。また、エディンバラ大学大倉洋之教授には、エディンバラ滞在期間中、日本の状況との違いも含めて英国のREFをめぐる現状について丁寧にご教示いただきました。ありがとうございました。

それ以外にも、本調査の趣旨を理解し快くご協力して頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

人間科学研究科プロジェクト IMPACT 一同



IMPACT REPORT No.2

2026 年3月31日

東日本大震災の被災地におけるアクションリサーチ
社会的インパクト評価 報告書

大阪大学大学院人間科学研究科 プロジェクト IMPACT

今井貴代子 大阪大学大学院人間科学研究科 特任講師

内山志保 大阪大学大学院人間科学研究科 特任研究員